

子どもの本のもつちから

第75回



清水真砂子

【翻訳家・児童文学者】

写真撮影：田中史彦

今月の1冊



『もりのなか』

マリ・ホール・エッツ／文・絵
まさきりこ／訳
福音館書店
1963年
1000円(税別)

最後はやっぱり『もりのなか』

昨年、冤罪の可能性きわめて大とされ、再審の開始が今や遅しと待たれている袴田巖元死刑囚の現在の日々を伝えるドキュメンタリー映画を一緒に観た友人が、映画館を出てぼつんと言いました。

「袴田さんは狂ってなんかいない。もうひとつの世界を創って、そこに身を置かなくては、死刑囚としてのこの長い年月を生きのびられなかつたんじゃないかな。今はまだ元に

戻れないでいるだけだよ」

はっとしました。あの男の子といっしょだ、と思ったのです。

「あの男の子」は紙の帽子をかぶり、新しいらっぱを持って、意気揚々とひとり森に向かいます。でも、一歩踏み入れた森の中は、様々なものの気配がして、彼はおびえはじめます。

彼はそこで、どうしたか。知っている動物たちを次々空想で呼び寄せ、自分がリーダーになって、動物たちと遊びながら、恐怖の森を進んでいきます。うさぎが一匹、どんな遊びにも加わらず、守り神のように彼の傍らに居つづけます。

やがて始めたかくれんぼ。彼は鬼になり、動物たちは姿を消します。

ただ、うさぎだけは別。うさぎは隠れないで、男の子の傍らに座っています。

と、そこに迎えのお父さんが登場。息子を肩車に乗せて家路に着きます。その時のお父さんの台詞の、なんてすてきなこと！

そうです。こうして袴田さんと絵本『もりのなか』は、私の中でつながりました。袴田さんにとってのお姉さんは、『もりのなか』のお父さんのような存在に違いありません。とてつもない不条理を、人はどう

したら正気のままに生きのびることが出来るのか。とてつもない不安や恐怖に、子どもはどうしたら立ち向かえるのか。人間に与えられている空想する力を思います。

『もりのなか』のあの男の子が袴田さんの前に現れたら、二人は黙って、当たり前のように手をつなぐのではないか。そんなことを想像したら、からだがぼつとあたたかくなりました。

さて、2011年1月から6年3カ月にわたって担当させていただいた本欄を、今月限りで降りることにいたしました。足もとの明るいうちにと思ったのです。

読者のみなさまの、有形無形の励ましに支えられた日々でした。長い間、本当にありがとうございました。

(しみず・まさこ)